

上野国府跡(前橋市)

国府推定区域/総社神社→宮鍋神社→御霊神社と見てみよう

古代の地域区分

凡例 ● 国府所在地

▲上野国と郡域

▲上野国府のイメージ図

今から 1,300 年前、前橋には 上野国の国府がありました。

645年の大化の改新(乙巳の変)以降、古代の律令国家は、現在の都道府県にあたる地方行政単位として全国を60余りの国に区分し、たいこく 大国、じょうこく 上国、ちゅうこく 中国、げこく 下国の4等級に格付けし、上野国は最上位の大国でした。

上野国とは？

大国の上野国の範囲は現在の群馬県とほぼ同じで、14の郡を管轄していました。

国庁・国衙・国府とは？

☆国庁とは？…「こくし 国司」という都から来た役人が儀式や政治を行う中心的な役割を担った役所の中枢施設をいいます。(現代で言えば、群馬県庁の知事部局)

☆国衙とは？…国庁の周囲に設けられた国の行政事務を行っていた役所群をいいます。(現代で言えば、群馬県庁の本庁舎全体)

☆国府とは？…国庁、国衙を含めた役所に勤務していた役人の館や、兵士などの宿舎、いち 市、学校、農民の家などを含む

範囲全体のことをいいます。(現代で言えば、群馬県庁とその周辺の大手町の範囲)

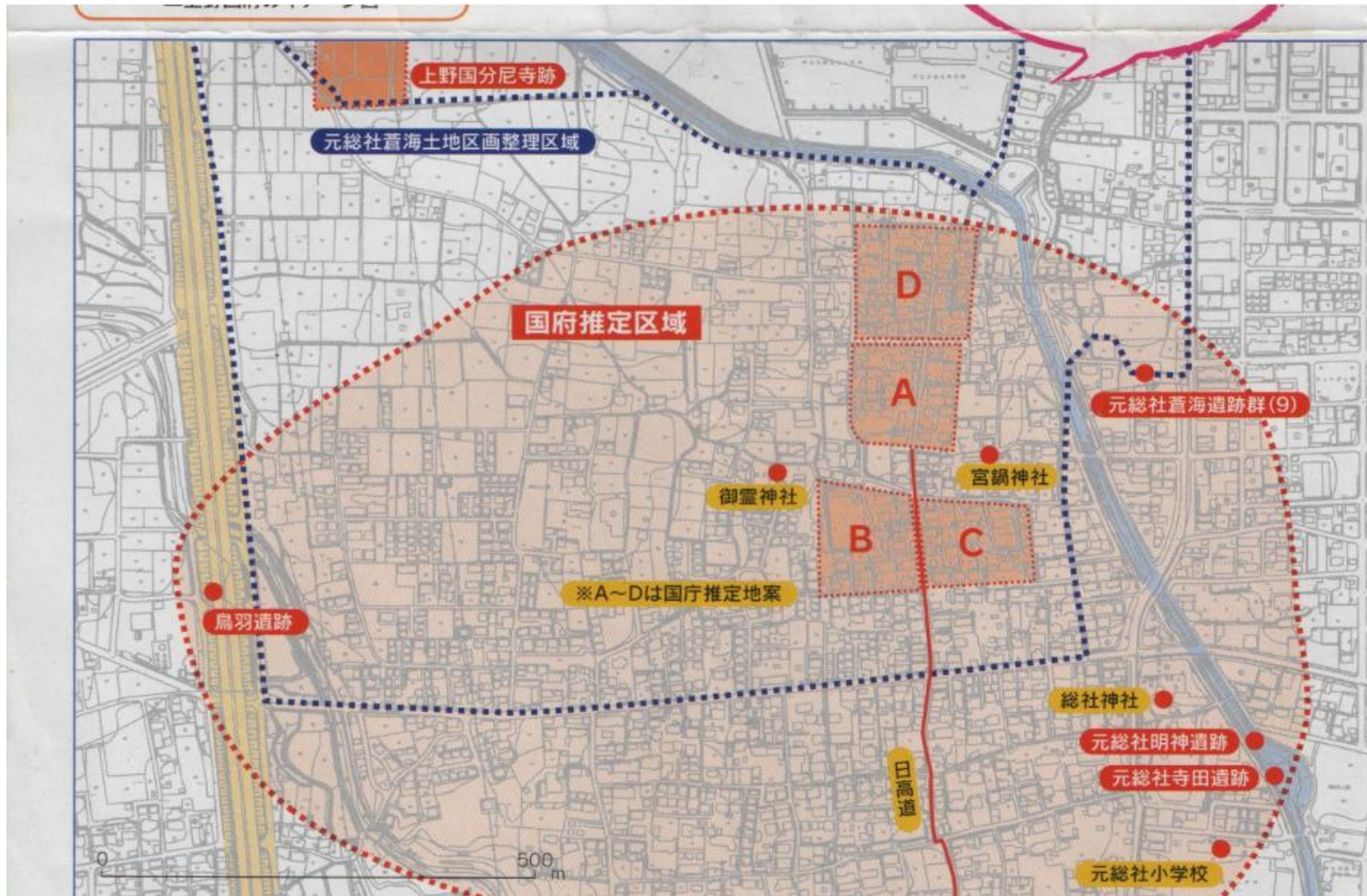
“幻の国府”から “国府のあるまち前橋”へ

今、全国各地で国府跡の発掘調査が進められています。そして“国のまほろば”として史跡公園になっています。そのような中で古代群馬の上野国府跡は“幻の国府”として、なかなか正確な位置がわかりませんでした。

平成11年から始まった元総社蒼海土地区画整理事業に伴う国府関連遺跡群の発掘調査は、これからいよいよ国府の発見にチャレンジする核心の調査に迫っていきます。

国府の中心である国庁の場所が見つかれば、前橋は“国府のあるまち”として新たな脚光を浴びることになるでしょう。

**上野国の中心、
国府がここ元総社に
あったのです。**



前橋市教育委員会文化財保護課パンフレットより

ここは上野国総社である総社神社



上野国総社神社略記

古代律令制下、国司は任国内の神社にて領幣したが、この神名を読み上げることから発し国司政治の衰退とともにその諸神の勧請とかわり国内の諸神を国府近くの一か所に合祀し総社とした。平安時代末期の創建と考えられる。

上野国十四郡諸社五百四十九柱の神々を迎祀しやがてその神名帳一巻がご神体となった。

本殿は慶長年間（十七世紀はじめ）の造営であるが桃山時代の様式を残し、昭和三十八年に群馬県指定の重要文化財となり保護されている。拜殿は天保十四年（一八四三）に再建された豪華な建造物である。なお総社神社のご宝物文化財としては御神体である上野国神名帳をはじめ子持勾玉、神鏡雲版・天正十四丙戌二月一日銘、銅製円板弥勒座像の懸仏・天正十三年六月二日附、坪伯耆守の奉書した北条氏康の掟書・天正十八年五月附、前田筑前守利家、浅野弾正少弐浅野長政の禁制等が蔵されている。

上野国総社神社 社務所

幸納 江田町 富澤 正
平成二十一年十二月吉日改修

郷土の文化財を愛護しましょう

境内



拝殿



「蒼海城跡地図」なる看板がある/蒼海城は上野国府跡に築かれていると云う



さて、上野国府跡に所在すると云う宮鍋神社へと向かおう/この川は牛池川



宮鍋神社へと進む



さて、ここが宮鍋神社





上野越後守護代の長尾氏が上野国府の地を城郭化し蒼海城と称したと記されている

宮鍋神社由緒

一、御祭神 経津主命 金山毘古神 金山毘賣神
一、例祭日 三月 七月 十月の各二十一日
一、創立年月日 不詳

人皇十代崇神天皇の第一皇子豊城入命が東国統治の命を奉じ、この地方に下降した際、宮之辺の地に経津主命を祭祀して武運長久を祈ったのが、総社神社の始まりと伝えられております。

その後、九十六代後醍醐天皇のとき、元弘の乱で北条氏が滅び建武中興の世となりました。

足利直義は戦功により関八州とそれに付属する伊豆、甲斐、越後の国の行政権を与えられ、天皇の皇子成良親王を奉じて鎌倉に入部しました。

家臣「長尾佐衛門尉景忠」は上野越後守護代となり、四男忠房は上野国府の地を給わりました。

忠房は国府を城郭化して蒼海城と称し、宮之辺の地より総社神社を現在地に移したようです。神社裏の貞和五年（一、三四九）の宝塔も長尾一族の建立したものであろうと群馬県人名大辞典に書かれています。長享二年（一、四八八）九月二十八日、僧の万里集九が角淵（玉村）より白井へ向かう途中国分寺跡あたりから見た展望を日記に「隔一村馬上望上野之惣社」（一村を隔てて馬上より上野惣社を拝す）とあります。また、古惣社（現宮鍋神社）の前を通過する折に「数株老樹斧屠残」（数株の老樹に斧の傷跡を残す）とあり、これらの日記から察するに、永禄九年（一、五六六）頃、武田軍と長尾軍の合戦により焼失した惣社神社は、宮之辺の地ではなく現在地であらうと思えます。

次に、宮鍋は宮之辺が変化したのではなく、惣社神社移転の跡地の東傍らの屋敷（二〇四二、二〇四二番地）に鑄物を業とする人々が定住して、経津主命に鑄物師が崇敬する製鉄の神、金山毘古神、金山毘賣神を合祀して「宮鍋神社」と称したのであろうと思えます。鍋という字は、他県の鑄物師の氏神には数多く使われている様です。前記二屋敷跡より多数の鑄物屑が発見されております。

明治三十年十月に木造烏居の建立記録が殿小路町にあり、大正八年四月十六日総社神社に合併されましたが、昭和六年十二月一日県の指示により、再び宮之辺の地に移転となりました。当社は今なお「宮鍋様」と称して、殿小路町、粟島町の崇敬の社であります。

以上の事項は、各種記録、史料、伝説、考古学者の研究資料等に基づき記載したものであります。

埼玉県児玉郡金屋にある古文書に

俣馬志定可出候惣社之鑄物師

被可除一里一錢也仍如件

戊 虎印 三月八日 俣和伯耆奉之（戊三月は天正十四年丙戌）

惣社より小田原まで宿々中

平成五年 六月

これは「上野國總社址」と記された石碑/現在の^{上野}上野國總社神社へ移される前はここにあったということらしい

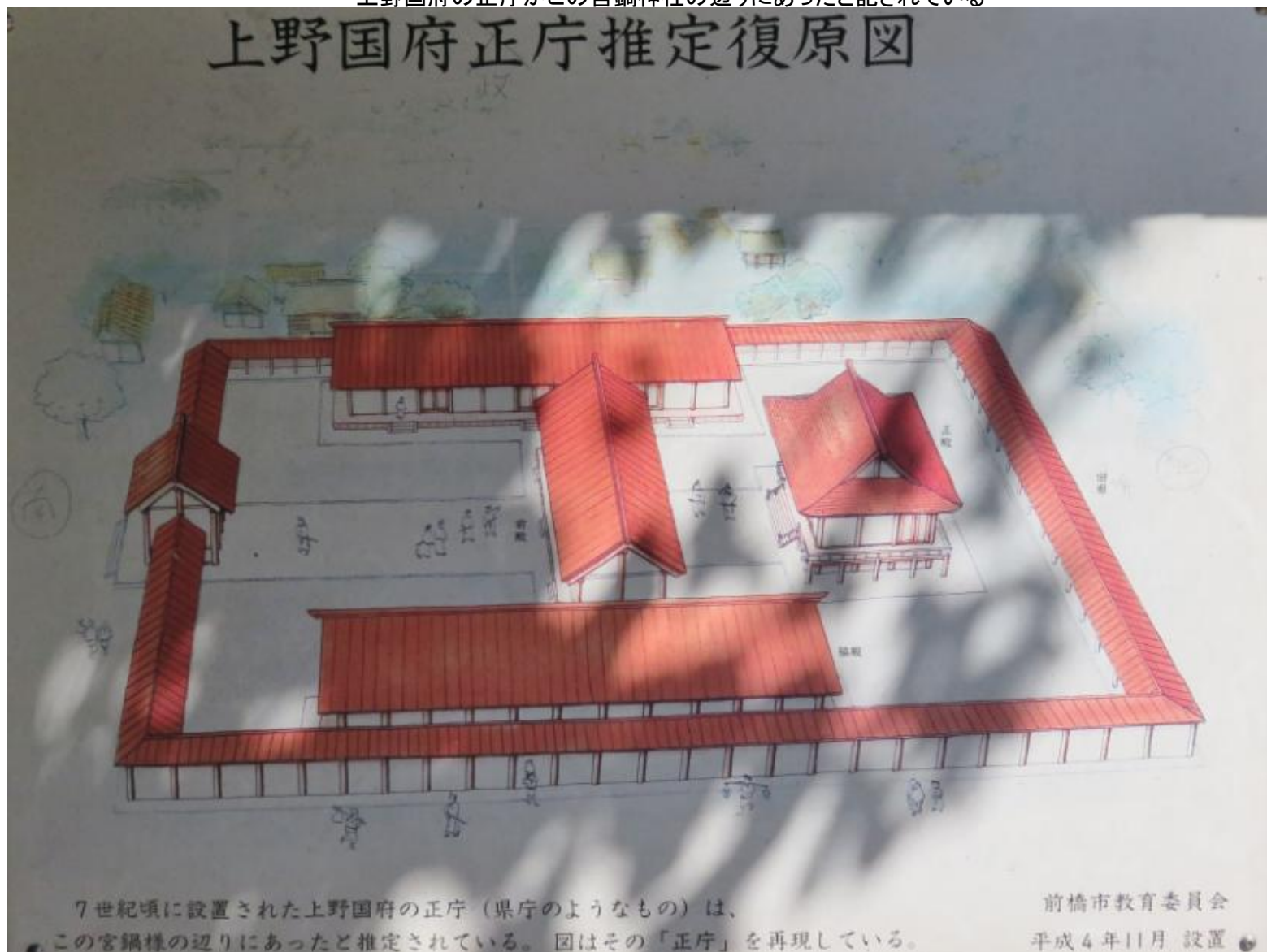


上野国府の説明坂が立っている



上野国府の正庁がこの宮鍋神社の辺りにあったと記されている

上野国府正庁推定復原図



さて、上野国府跡のエリアにある御霊神社方向へ進もう/道路沿いが草が刈られて整地されている



重機で何か行われているようだ



実はここに蒼海城本丸の土塁が残っていたと云うが、削られつつあるようだ



少し進んで振り返って見たところ/右手の雰囲気土墨の名残りを醸し出している



そこを大きく退いて見たところで、まだ残っている木々の所に土塁の高まりが見られる/まもなく削られる運命か



これはその右手を見たところで、この前方でも何か行われているようだ



近づいて見ると、こんな塩梅



この辺りがその先にある先程の道路から見たところ



どうも蒼海城本丸エリア(上野国府跡)の発掘調査が行われているようだ



測量をしている





右手に移動して見たところ



そこでアップで見たところ



さて、ここが御霊神社





左手から見たところ



御霊神社と長尾氏由緒

一、御祭神、豊城入彦命五世の孫、田道（大地に化身して風呂沼に住んでいた傳説の人） 外上毛の国

に殉ぜる霊神、長尾氏の祖、村岡小五郎忠通と五男鎌倉権五郎景政
例祭日 十月初亥、現在は十月十九日

創立年月は不詳なり、社傳に依ると往古此の地に上野国々府あり
国府に仕える役人の子弟を教育する学校あり、其の傍に招魂社あり
て上野国神名帳西群馬郡の内に從四位下学校院若御子明神と記載あ
るは彼の招魂社なりと傳えり。桓武帝第五の皇子高原親王より八世の
後胤を村岡小五郎忠通と云い、相州に住し鎮守府將軍鎌倉権守と稱す、
五男を景政と云い、前九年後三年の奥州の役には忠通副將格にて数
々の戦功を立てたり、忠通寛治三年七十余才にて陣中に病死す、
景政忠通の軍を引率して先登にたち戦う、其の後鳥海と矢記ある矢
、景政弓手の目にさゝる、景政其の矢をぬき取り、数日後其の矢に
て鳥海を討取れり敵味方共に其の勇感賞せざる者なしと、奥州平定
して朝廷は忠通に御霊の神号を賜る、一族相州長尾郷に一字建立して
御霊宮と稱し長尾一家の氏神とす、景政より、四世を定景と云う。
治承四年頼朝兵を營ぐ、定景平家方と頼朝を攻むれど後捕えられ三浦
義澄に預けられ後許免されたり、承久元年一月二十七日源実朝右大
臣拜賀の爲鶴ヶ岡八幡宮参賀の帰り道石段にて頼朝の子別当公暁に殺害
されたり、北條氏公暁討伐を三浦義村に命ず、義村は直に長尾定景
に命ず、定景雜賀次郎等五人の力士を引率して鶴ヶ峯後面の峯にて
公暁を討取れり、兼て北條氏は三浦氏も頼朝の遺臣なれば之を亡ぼ
さんと其の機会を伺い待てり、室治元年三浦氏も其の計畧にはまり、
三浦長尾両氏一族二百七十余人頼朝公靈願法華堂前で自害せり、
之を室治の乱と云う。元弘三年北條氏滅び後醍醐天皇の建武中興の
世となり、足利尊氏直義兄弟も天皇方なれば直義成良親王（四才）を
奉じて元弘三年關東十ヶ国の行政司法権を委任され鎌倉え入った、
上杉重能を直義の家宰とす、長尾景忠は建武四年（一三三七年）に
は上野守護代となり後越後守護代も兼務せり、後弟景恒が越後守護
代となり越後長尾の祖となる、景忠の長子清景は白井城主となり四男
忠房は父景忠と共に国府を城郭化して蒼海城と稱し惣社長尾九代二
百十余年の基を築けり、直義は尊氏に毒殺され養子基氏の頃貞治二
年頃關東も平穩に治れり、忠房鎌倉長尾郷より御霊宮を分靈して、
若御子明神に合祠し現在の地に創立し惣社長尾の氏神とす、某歴史
研究家先生は、総社神社も長尾氏が旧地より現地に移転し、神社裏
の貞和五年の奉塔も長尾一族が建立した物であろうと推定して居り
ます、永禄九年頃蒼海城も武田氏の攻畧する所となり御霊宮も蒼海城
と共に跡形なく破壊され頭方の二男忠治、古市宿より江戸時代の始
め今の地に移り御霊宮を再建修葺者となつて中將坊としようし數代
の後長尾山東覚院と云い明治二十二年長尾將齊の時赤石中政氏の助力に
依つて元総社村各町内の寄付によつて再建となりぬ、又境内の千原申
は殿小路町阿弥陀寺町の世話人によつて万延元年庚申年に祭礼が出
来る様万延元年以前三年から石屋に依頼して元総社村中、大友村、石
倉村全戸から一体づつの庚申塔の寄付を仰ぎお祭は毎年の初庚申日
以上再建に当り記録す。

平成 二年 十月 吉日 記之

長尾 貞治 記

ここにも、この地が上野国の国府であり、長尾氏が城郭化し蒼海城と称したと記されている

振り返って見たところ



鳥居の手前の参道から右手に先程の発掘現場が見える



これは御霊神社の背後で社殿が建つ地形を見たところ



左手を見るとこの地形は土塁の名残りのようにも思える



その先に続いている/この更に少し先が削られてしまったエリア



参考ホームページ

http://www.city.maebashi.gunma.jp/kurashi/230/266/267/p008118_d/fil/kokuhu.pdf#search=%27%E4%B8%8A%E9%87%8E%E5%9B%BD%E5%BA%9C%E8%B7%A1%27

<http://tigerdream-no.blog.jp/archives/8746347.html>

<http://kzusankm2.exblog.jp/25972382/>

<http://komatsu0513.heteml.jp/kozuke.htm>

